

旅人にとって利尻・礼文で 過ごす時間は一生に一度かもしれない だったら、見たいもの欲していることに 応えて喜んで帰ってもらわないと

黒川 由希 (くろかわ ゆき) さん

1980年札幌市生まれ。高校卒業後サービス業を志し、リゾートホテル3年、大手旅行代理店添乗員5年を経て利尻島に移住。出産後、子育てをしながら北海道知事認定「自然ガイド」資格取得。日本特用林産振興会認定「きのこアドバイザー」、きのこ検定2級、上級救命講習修了。アウトドアメーカーのPatagonia、mont-bellのプロガイド登録事業者でもある。

北海道に移住 (U・I・Jターン) して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。30回目となる今回は、利尻富士町でネイチャーガイドオフィス『アイランド・タイム』を主宰し、大好きな利尻・礼文島でオーダーメイドツアー中心にガイドをしている黒川由希さんです。



逆さ利尻山 (本人撮影)

利尻島との出会いは？

21歳で転職した旅行代理店の新人添乗員として、札幌雪まつり、函館などを回るツアーをひと冬経験しました。当時の上司から、「今年の春から稚内・利尻・礼文の担当になってみない？ぜひやってもらいたい」と。羽田から稚内の直行便が始まった時期でもありました。大人気の島に旅の通^つたちが押し寄せるツアー添乗が、どれほど大変なものか、新人添乗員の私は分かっていませんでしたね。「稚内に宿舎があるから、4月から稚内で暮らしてほしい。空港でお客さんを受け入れて、島の案内をして、また空港から見送るとのことだから」と、シンプルな説明を受け、私は稚内に向かったのです。

23年前の利尻礼文の観光はどういう状況でしたか？

2001年は島観光のピークと言われていた頃でした。利尻島だけで一年に約20万人ほどが宿泊していました。肌感覚ですが、今の3倍ぐらいのお客様が来ていましたね。3月下旬から11月までツアーがありました。1年目は忙しいし覚えることが多くて、必死でした。当時は島にガイド会社がほとんどなくて、添乗員がすべて説明するのが当たり前でした。山登りや花が好きだったわけではありませんが、先輩添乗員や地元のバスガイドさんたちの説明を見ながら、花のガイドブックを見て覚えていきました。違う会社であっても皆さん優しくかったですね。

利尻島へ移住するきっかけは？

冬場は島での仕事がないので札幌に戻り、函館観光などを担当して戻るといふ暮らしを繰り返していました。そんな時、ある方から「お前さんは利尻の冬の暮らし知っているのかい？」と質問されました。私は「仕事がないので島を離れるから、知らないです」。「じゃあ、現地ガイドとは名乗れないね」と言われたのです。悔しいと感じました。当時勤めていた旅行代理店に、「必ず春には添乗員に戻るから島で暮らすために一度札幌での添乗の仕事をやめさせてほしい」と言い、冬の利尻暮らし体験をすることにしました。飲食店でのアルバイトなどを経て、結婚、出産という人生の節目を利尻で迎え、結果的に移住していました。

利尻島の魅力を一言でお願いします

島に戻ると、風や波の音がずっと耳に入ってきて、居心地がいいのです。田舎だからこそ人との距離が近いのも特徴ですね。うるさいな、面倒だと思ふこともありますが、プラス面が多いです。私は朝カーテンを開けると、利尻山がドーンと見えるここでの暮らしは、道内、道外のどこにもないと思うのです。ニセコ、知床、日高にも素晴らしい山がありますが、利尻山は私にとって特別なんです。

ガイドをしていてよかったなと思うのはどんな時？

「人の一生で、自然に親しむことほど有益なことはありません。人はもともと自然の一員なのですから、自然に溶けこんでこそ、はじめて生きている喜びを感じることができるのだと思います」。これは2年前に、リピーター様からいただいた言葉の一部です。「植物学者の牧野^{まきの}富太郎^{とみたろう}さんの言葉なんだけどね。牧野さんが植物に向き合う姿と、黒川さんのガイドとしての姿勢が似ていると思うのよ」とおっしゃってくださいました。驚きました。私はそんな立派なガイドではないけれど、大好きな場所で自然の素晴らしさを伝えられるこの仕事に出会えたことに、生き甲斐を感じています。そして、とても幸せだといつも感じています。

今後についてのお考えを教えてください

3年前から本格的にスタートした、「秋のきのこガイドツアー」を頑張りたいです。島のキノコの種類や特徴、おいしい食べ方などを紹介し、その魅力を観光客や島民に伝えています。キノコは「森のお掃除屋さん」なんですよ。その役割を知って、存在自体をもっと好きになってほしいです。12年前から図鑑を片手に歩いて勉強を始めました。利尻と礼文島をフィールドにするガイドにとって、お仕事をいただくという意味での最盛期は5～8月です。でも9、10月は晴天率も高く利尻山の山頂が見えてとても美しいのです。その景色に加えキノコを説明できるガイドとして独自性を確立したいです。そして、地元の人にこそ、キノコの見方、食べ方を知ってほしいので、ガイド料金に島民価格を設定しているんですよ。

(2024年9月取材)

インタビュー後記

コロナの2年間は子ども2人を抱えてどうやって生きていけばいいのか考えざるを得ない時期だったそうです。でも、この逆境があったからこそ、個人事業主として独立し、ガイドして生きていこうと由希さんは決心しました。周りの人たちからは、よりによってこんな時期に独立開業してバカだよと言われ、心配もされたそうです。でも、自分を信じてよかった、諦めなくてよかったと笑顔で振り返ります。お客様に満足してもらい、喜んでもらうために、学びを継続し頑張っている由希さんを、全力でプロデュースしなくては！と私も覚悟を決めました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表